

◎原初の力映すチャンドラレーカの舞踊

チェンブーラ

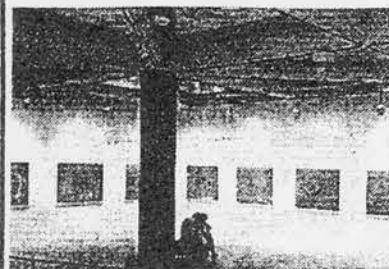
ら自由に」愛し合い、滋養を与え合い、ポスト・ガンジーの重要な課題であった、公民権問題、女性の解放、環境問題などを一緒に戦ってきた。

この文章は、ピアニストの江戸京子さんの昨年、毎日新聞にのせていたものである。イタの舞踊家キヤドレーカのご思想と書き手の江戸京子さんの思想が同時にわかる。また、「バカ」に対して、時に嫌悪し、時に許さる。何かは、それがエッセンスかホーノかの違いであることに気付く。



国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

フェミニズムから見た美術史



笠原恵実子の作品「PINK」
の展示風景＝栃木県立美術館

※領域を提示することで、父権制社会が女性を定義づけた「聖なる母性(子宮)」と「魅惑的だが罪深い肉体(膣)」というお定まりのイメージとは違う何かを見つけ出させようとしている。

最後の部屋にインスタレーションされた笠原恵実子の9枚の写真作品「PINK」は、膣の奥から子宮に至る子宮頸管の入り口、子宮口を写したものだ。

最後の部屋にインスタレーションされた笠原恵実子の9枚の写真作品「PINK」

ここまで見抜いた中川さんのすごさ!!

今日の女性を取り巻く状況は、相変わらず厳しい。しかし、日常生活の小さな場所々々で、痛み、失敗、もがきながらも自分の在り方、生き方を問いつけている女性が確実に増えているのも事実だ。

その問いかけを受け止めて、その問いかけでもセックス(生物学的性)やジェンダー(文化的・社会的性)をテーマとした展覧会が口につくようになった。例えば「生と性」女性展(東京・南青山、く女性像展)(東京・南青山、スバール)、「ジェンダー記憶の淵から」(東京・恵比寿、東京都写真美術館)などである。これらすべてが同時代美術展の9月28日まで東京都立美術館の栃木県立美術館で開催中の「揺れる女」展のイメージ・フェミニズムの誕生から現代まで、女性の権利運動が起った19世紀初頭から現代に至るまでを美術史的な視野で構成している。

主題は何であれ、実は男性の性的視線に着目して描かれたフランス・サロンの展覧会。女性の文学者、哲学者や女性社会主義者の行動を諷刺的に皮肉った「三三三」の展覧会。女性を美しく、威厳し、性けるシュルレアリスム作品。性別も肉體も不確かな時代の多様な人間の在り方を印象的に描いたマルレーネ・デュマスなど、同じフェミニズムの視点から通観した今までの試みがある。

いろいろな女性たちが、いろいろな女性たちをテーマにしているんだね。セックスやジェンダーをテーマにしている人もそう。

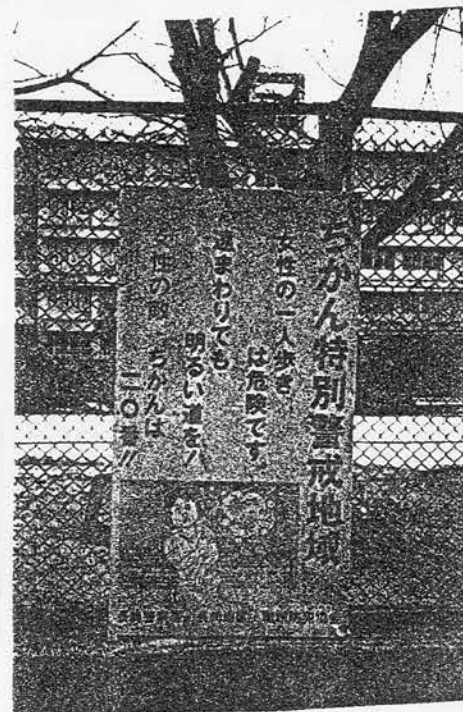
若い子宮口モデルたちは「自分の体の外側と内側の関係を知りたい」などと語り、笠原の作品意図に自分のアイデンティティ探しを重ねていたが、私がこの作品について話した時、一番反応したのは、娘、妻、母としてさまざまな人生を送り、今、更年期を迎えた友人たちであった。彼女たちは初め、子宮口を写すという事実に対して嫌悪感を示したのだが、女性としての半生を振り返った時、この作品を実感をもって理解し、受容したのである。女性たちが受け身の立場でなく、作家としても見る人としても真に誇れるセルフイメージを紡ぎ出す時、フェミニズムの新たな視野が広がるに違いない。

(男)社会は痴漢を許してきた——!!



まるで女が悪いように考えている。それが下の看板である。ばってん・うーちんの会が市内の看板からひろってきた「ことば」がこれ。

〈長崎市 桜町〉



〈長崎市 片瀬町〉



いつだったか、女高生がチカンにあて落ちこんでいた悩みに答えて、大学教授が「安心なさい。あなたをどうしようという問題ではない。カラダをさわりたいだけなのです」と解答していたが、男にとって、チカンなんて、どうってないわけだ。上の看板の文も、加害者への懲罰とか「止めなさい」とかは一切、かいてない。あるのは被害者側へのいましめが書いてあるだけ。チカンにあうから夜の勤務はできませんといえるのか。遠回りすれば明るい道があるというのか。「坂の長崎」の登りつめる石段の道には、くら〜い街灯がにびく光っているだけ。

とにかく「性」に関することは、みんな「女」が原因と考えているわけ。

はっきりにしていることは、

＜痴漢は犯罪なのだ＞ということ。

加害者側(男たち)に、自覚を促がすポスターをつくるべきだ、
ところが、出ました。下の投書をみると、夜の暗いところだけに
4カン行為があてはまらないこともわかります。そして、全国に、
性に関しては、加害者側をキツく罰するやり方を要求しよう。
援助交際に関しても、買春 にしても、(っか)見張っておこう。
「される側」への説教で、ことを終らせないように――。

.....みんなの広場

⑤

＜毎日 97.9.30＞より

大歓迎「痴漢は犯罪」ポスター

私は通勤に地下鉄を利用しています。一番不快なことは痴漢です。大半の女性が年齢に限らず、皆同じ思いをしたことがあると思います。若い男の子からおじさんまで、いろいろな人が平気な顔をして不自然に近づき、さまざまな痴漢行為をします。本当に腹立たしいものです。それ、なかなか捕まらないものだから、ちょっと触るだけだったら気付かないだろうという安易な感じがすごく危険だと思います。今日、そんな思いを吹き飛ばしてくれるようなポスターを見ました。「痴漢は犯罪です」と大書してある福岡県警鉄道警察隊のポスターでした。被害にあった時の対策も書かれており、本当にうれしかったです。電車中に張ればいいのにも思いました。小さなポスターですが、大きな効果が絶対あると思います。人を救う情報は非常にシニフルなものじゃないでしょうか。



ばってんうーまんの会は、女の身体を商品化する商業に対しては、何度か抗議をしてきたが、直接抗議文を手渡しにいくと、そこで必ずお会うことばに『女性の身体は美しいから、いいではないか』がある。『女から見れば、男の身体も美しい。なぜ、女だけを出したがるのか――男が観る、という既成概念はないか』という切り返しと共に『エロス』は、否定しないのだと返したこともあったが、一ページに出した、4ヤンドラレーカを語る文に、それがあてうれしい。また、「聖なる母性(子宮)」「みわく的だが、罪深い肉体(膣)」も、性に関しては、すべて女を悪者にしてきた(いる)ナゾが解けたような気がする。